

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

* : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

Ⓒ : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。
無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 朝日講座「知の冒険」
Copyright 2015, 渡辺 裕

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Asahi Lectures “Adventures of the Mind”
Copyright 2015, Hiroshi Watanabe

作品とは？ 演奏とは？

—“デジタル・リマスター”の時代の音とメディア—

朝日講座「媒介／メディアのつくる世界」第1回

2015年9月14日

渡辺 裕（聴覚文化論・音楽社会史）

はじめに

● この講座の基本テーマ

「媒介」「媒体」「媒介者」「媒介作用」
=“medium”（複数形：“media”）
→ 狭義の「メディア」の話にもつながる

● 媒介者は「黒衣」か？

むしろそちらの側に焦点を合わせて見てみることで、これまでとは違う世界、見えなかったドラマ、背景に隠れていたメカニズムなどがみえてくるようになる

→狭義の「メディア」についても少し違う見方ができるようになるのでは？

CDは音楽の「容器」のようなもの？

● 音楽の「メディア」

レコード、CD、ネット配信 etc.

● 「透明なメディア」説

音楽のあり方はこれらのメディアと関わりなく決まっている

CDだろうがネット配信だろうが「音楽そのもの」は同じ！

→メディアは外にある「音楽」を記録する「媒体」

しかし本当にそうなのだろうか？

音楽とメディアの相互作用

● 音楽のあり方がメディアと相関的に決まる側面

(例) 演奏スタイルの好みもそれに対応して変化

モーツァルト 《弦楽四重奏曲第14番ト長調 K.387》

①バリリ四重奏団 (1953)

②アルバン・ベルク四重奏団 (1987)

この変化はアナログ録音からデジタル録音への変化に対応

メディアは「透明」で音楽のあり方に関わらないとは言えないのでは？

「音楽作品」「演奏」の概念とメディア

- メディアは、音楽文化全体を支える制度そのものを根柢から規定している！
 - 「音楽作品」「演奏」といった、音楽について考えたり語ったりする行為を支える根本概念もその所産
- 「音楽作品」や「演奏」の存在は決して自明ではない！
 - 「音楽作品の同一性」をめぐる美学的論争の数々
 - 「音楽作品」はどこにあるのか？
 - 演奏はそれぞれ違うのに、なぜ同じ「作品」と言えるか？
 - 楽譜が同じだったら同じ「作品」なのか、etc.
 - こういう議論は一部の学者の屁理屈にすぎない？

**しかし、音楽をめぐるメディア状況の変化とともに、
そう簡単に片付けられないような問題が生じている！**

「デジタル・リマスター」の時代

- 「デジタル・リマスター」全盛の状況下で、「作品」や「演奏」をめぐるわれわれの固定観念を揺さぶるような問題が生じはじめている

→ 同じ「演奏」のCDが何種類も出ている！

- 最も象徴的なケース

フルトヴェングラー「バイロイトの《第9》」

第二次大戦後中断されていたバイロイト音楽祭の再開にあたり、1951年7月29日に行われた祝祭コンサートにおけるベートーヴェンの《第9交響曲》の録音。今なお、《第9》の記念碑的な名演として高い評価を受けている。

いったい何が起きているのか？

「バイロイトの《第九》」 EMIリマスターによるCD

- ベートーヴェン「交響曲第9番ニ短調 作品125」、ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮バイロイト祝祭管弦楽団、EMI [イギリス] CDH 769801 2、1984年
- 同曲同演奏、EMI [イギリス] 7243 5 66218 2 4、1997年
- 同曲同演奏、EMIミュージック・ジャパン、TOCE-14054、2007年
- 同曲同演奏、EMIミュージック・ジャパン、TOGE-11005、2011年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

「デジタル・リマスター」の時代

- リマスタリング自体は、今にはじまったことではない
- しかしほとんど重要視されていなかった
 - ・ リマスタリングの時期や方法についての情報はほとんど示されていない
 - ・ 何の記載もないまま新しいリマスターになっている場合も・・・
- 「リマスタリング」は透明な存在！
 - 「音が良くなった」「本物に近づいた」くらいにしか思われていなかった。
 - しかし「本物」とは？ 何を基準に「音が良くなった」のだろうか？？
- 最近になって「黒衣」であることを脱しつつある
 - ・ 演奏者や演奏年月日と同様にエンジニアの名前や方法を記載することが必須に
 - ・ むしろ新リマスターであることやその内容を「売り」にする局面も

しかし、この程度はまだ序の口！

「バイロイトの《第九》」 正規盤以外のCD

- ベートーヴェン「交響曲第9番二短調 作品125」、ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮バイロイト祝祭管弦楽団、デルタ・エンターテイメント、DCCA-0029、2006年
- 同曲同演奏、Mythos、MPCD9017（輸入盤）、2007年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

「デジタル・リマスター」の時代

- EMI正規盤以外のリマスターが続々登場
- 多くが初期LPを原盤とした復刻
- 復刻にあたるエンジニアの感覚や個性が前面に出てくることになり、聴き手もそれに反応
 - 「カリスマ復刻師」の出現
 - 可能な限り多くの復刻盤を取り上げた比較サイトや、2ちゃんねるの「フルトヴェングラーのディスク音質比較スレ」なども出現

「バイロイトの《第九》」「カリスマ」復刻師たち

オバート=ゾーン (ナクソス・レーベル)

- ベートーヴェン「交響曲第9番ニ短調 作品125」、ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮バイロイト祝祭管弦楽団、Naxos、8.111060 (輸入盤)、2006年

太田憲志 (オタケン・レーベル)

- 同曲同演奏、Otaken、TKC-301、2005年
- 同曲同演奏、Otaken、TKC-309、2007年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

比較サイトの例

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

没後50年記念1 「バイロイトの第9・(再)評価」
(フルトヴェングラー鑑賞記)

[http://www.geocities.jp/furtwanglercdreview/
bayreuth.html](http://www.geocities.jp/furtwanglercdreview/bayreuth.html)

2ちゃんねるの「音質比較」スレッドの例

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

フルトヴェングラーのディスク音質比較スレ
(2ちゃんねる)

[http://music8.2ch.net/test/read.cgi/classical/
1171962426](http://music8.2ch.net/test/read.cgi/classical/1171962426)

比較サイトに取り上げられている 「よい例」と「わるい例」

- ベートーヴェン「交響曲第9番二短調 作品125」、ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮バイロイト祝祭管弦楽団、デルタ・エンターテイメント、DCCA-0029、2006年
- 同曲同演奏、キングインターナショナル、FURT1101（輸入盤：原盤Tahra [フランス] FURT1101-1104）、2005年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

「リマスター」への関心の確実な広がり

- 「リマスター」の周囲に一定のコミュニティができあがり一つの「文化」が形作られている現代
- その中で、二つの方向性がせめぎあっているような状況
 - 一方で、一つの演奏の「本来の音」に近づくという謳い文句と信仰
 - 聴き手の側も「オーセンティック」なものという感覚で受容
 - 他方でかなりの部分が趣味や個人差の問題として扱われる
 - 決定的な解、「本来の音」は、実は存在していないという認識を共有
- この二つの方向性は本来両立しないのでは？
 - この対立する両者の由来はどこに？
 - この両者の微妙な関わり合い方には、どこかデジャヴ感が・・・

「バイロイトの《第九》」には、まだまだこんな問題が・・・

● 2006年発見のバイエルン放送協会所蔵のテープ

- ・ 「バイロイトの《第九》」には、かねてから「編集」疑惑があった
- ・ こちらが本当の実況録音テープ？
- ・ 「伝説の名演」はやはり編集されていたということで大きなニュースに
- ・ 真相はわからないところもあるが、合成物だったことはたしか

しかし「編集」ということ自体は、実はごく当たり前に行われていること

→むしろ、クラシック音楽の「一本採り幻想」が制度的・慣習的な「文化」であることを証しているのでは？

● 「足音入り」CDという存在

- ・ 足音も「演奏」の一部か!?
- ・ 「足音入り」が発売されているのは日本だけ!!
- ・ 「文化」の問題もさることながら、「マスターテープ」のオーセンティシティ、「オリジナル」とは何なのか、ということ問いかける事例でもある

フルトベングラーの「第9」、別の音源見つかる

1951年のドイツ・パイロイト音楽祭でフルトベングラーが指揮したベートーベンの「交響曲第9番」(EMI)はクラシックの伝説的名盤といわれる。ところで最近、この同じ演奏を、バイエルン放送が録音した音源が見つかった。状態は良く、演奏の細部が明確に聞きとれる。すると、こんな推論が浮上した。「伝説的名盤」は、本番の録音にリハーサルなどを取り込んで大胆に編集したものなのではないか――。(上坂樹)

「価値は下がらず」

パイロイト音楽祭のベートーベン「交響曲第9番」演奏会 1951年7月29日、第2次世界大戦で中断されていた音楽祭が再開された。フルトベングラーの指揮で、パイロイト祝祭管弦楽団と同合唱団が演奏。ソリストにシュワルツコップ(ソプラノ)、ヘンゲン(アルト)、ホップ(テノール)、エーデルマン(バス)らの名歌手が加わった。20世紀を代表するベートーベン演奏の偉大な成果とされている。

51年のパイロイト音楽祭で、「第9」のリハーサルに臨むフルトベングラー

バイエルン放送で見つかった録音テープ

伝説の名盤、もしや編集?

聴衆のせき・第3楽章冒頭のバイオリン早い…

ライブ録音は、うわさを聞いたチェロ奏者カルテンホルンが08年にバイエルン放送に照会し、後日、資料室で見つかった。放送記録も残り、箱に録音技師の名前もあった。同年10月に同放送関係者や音楽家らが試聴調査し、「51年のパイロイト」と判断したという。しかし、この「バイエルン版」は、EMI盤と様々な点で違っていた。例えば第3楽章冒頭はバイオリンの出が早い。終楽章でコーラスが「Mensch」と歌う部分に激しい音量変化がない。聴衆のせきも、第1楽章から明確に聞こえた。カルテンホルンと親交がある、日本の「フルトベングラー・センター」の中村政行会長も、現地の調査会に参加した。中村会長は「EMI盤は聴衆ノイズを消すため、一部をリハーサ

ルと差し替えたのではないかと。様々な「化粧」を施したことになるが、スタジオ録音が中心だった当時ならありうる」と語る。「センター」の顧問で、半世紀にわたりフルトベングラーの音源を聴いてきた榎山浩介さんは比較の上で、「こう語る。『EMI盤は、全体の4

分の3が編集したものではないか。当時の産儀からして、ライブ録音以外に音源を使うならリハーサルだろう。バイエルン版は、EMI盤では破綻がある合唱の出来がよく、終楽章の最後の緩急感もすごい。戦後の新時代に向けたフルトベングラーの思いが伝わる」EMI盤には、実は以前から「一部が編集されているのでは」と想像を巡らすファンがいた。ただ、古い録音に詳しい音楽評論家の

山崎浩太郎さんは言う。「編集が加わったものだとすると、EMI盤の芸術的価値は下がらない。優秀を論じず、虚心に聴き比べ、フルトベングラーの神格化を避けて、多面的に音楽を愛しむことが重要だ」バイエルン版は、バイエルン放送の協力で「センター」が最近、CD化した。入手には入会が必要。詳しくは「センター」のサイト(www.ftr-center.co.jp)へ。」

* 朝日新聞 2007年7月26日 (夕刊12ページ)

©朝日新聞社

「バイロイトの《第九》」には、まだまだこんな問題が・・・

- ベートーヴェン「交響曲第9番二短調 作品125」、ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮バイロイト祝祭管弦楽団（バイエルン放送協会所蔵テープによる）、キングインターナショナル、KKCC4448（輸入盤：原盤Orfeo [ドイツ] C754 081 B）、2008年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

「新発見」音源をめぐる喧噪(1)

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

フルトヴェングラー「バイロイトの《第9》」再発見!!
(『レコード芸術』2007年9月号)

「新発見」音源をめぐる喧噪(2)

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

特集＝ヴィルヘルム・フルトヴェングラー
バイロイト「第九」は何故名演か？
(『音楽現代』2007年12月号)

「バイロイトの《第九》」には、まだまだこんな問題が・・・

● 「足音入り」CD

ベートーヴェン「交響曲第9番二短調 作品125」（足音入り）、ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮バイロイト祝祭管弦楽団、東芝EMI株式会社、TOCE-6510、1990年
同曲同演奏、東芝EMI株式会社、TOCE-55701、2004年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

メディアの根本にかかわる問題へ

● さきほど感じたデジャヴ感の正体は？

「作品」と「演奏」の間にも同じような関係
両者の間にしばしば生じてきたアポリア的な問題

→ 「作品：演奏 ≡ 演奏：リマスタリング」という関係が生じてくる構造
をメディア論的に読み解いてみたら??

● 演奏とリマスタリングの関係を作り出しているのは、新旧それぞれのメディア状況に対応した価値観や感性のあり方の相剋

- ・ リマスタリングの多様性、差異への関心や認識を可能にした現在のメディア状況
- ・ 演奏の同一性、オーセンティシティといった要素は、「デジタル化以前」のレコードのあり方に由来する感性や認識が残存している結果

メディアの根本にかかわる問題へ

- 「作品」と「演奏」の関係についても同じことが・・・
 - ・ 今われわれがイメージするような「作品」と「演奏」の関係は、レコード・メディアの普及・改良と相関的に出てきた
 - ・ レコードに記録され、繰り返し聴かれることによって、作品の細部の奏法や解釈がはじめて認識され、その多様性が前景化
 - ・ 他方で、「レコード以前」の作品の同一性、オーセンティシティの概念や感覚も残存 →このような感覚は現在にいたるまで残り続けている
- 「演奏」「演奏家」はもちろん存在したが、それらを「作品」と関連づけるしかた、「作品」との関係で他の「演奏家」の「演奏」と関連づけるしかたが決定的に変化

メディアの根本にかかわる問題へ

●では、そんなに強固な「作品」感覚の由来は？

- ・「楽譜」というメディアの存在
 - 楽譜をもたない文化において「作品」概念は成立しえたか？
- ・何をもって「同じ」「違う」とみなすか、という基準がすでに問題
 - テンポも性格も全く違う演奏を、楽譜が同じだから同じ「作品」とみなすという発想は相当に特殊
- ・西洋においては、「作曲する」ことは「楽譜を書く」こと！
 - 提示部と全く同じものが再現部で繰り返され、調性だけ変わる「ソナタ形式」の概念など、楽譜なしにはありえないこと

その非常に特殊な音楽の概念や感性が内面化され、今でも強固に受け継がれている！

→しかし、「西洋」「非西洋」の二分法で片付く話ではない！

最新のメディア状況がもたらしたリマスタリングから、レコード、楽譜、さらには楽譜以前の「古層」までが混ざりあったりぶつかり合ったりしながら展開する・・・それが「文化」というもの

メディアの根本にかかわる問題へ

「同じ」と「違う」の基準自体が楽譜の
存在によって形作られていること

谷正人

『イラン音楽一声の文化と即興』

青土社、2007年

[http://www.seidosha.co.jp/
index.php?cmd=read&page=
%A5%A4%A5%E9%A5F3%B2
%BB%B3%DA&word=%C3%AB
%C0%B5%BF%CD](http://www.seidosha.co.jp/index.php?cmd=read&page=%A5%A4%A5%E9%A5F3%B2%BB%B3%DA&word=%C3%AB%C0%B5%BF%CD)

メディアの根本にかかわる問題へ

楽譜なしに、本当に「同じ」曲の演奏と言える？

- バッハ「管弦楽組曲第3番ニ長調BWV1068」（序曲）、
ウィルヘルム・フルトヴェングラー指揮ベルリン・フィル
ハーモニー管弦楽団（1948年録音）、ポリドール、
POCG-2352、1991年
- 同曲、ウィリアム・マロック指揮ボストン古楽ソロイスト
（1989年録音）、WAVEディストリビューション、
WWCC2001（輸入盤：原盤Koch International [アメリ
カ合衆国] 3-7037-2H1）、1991年

著作権等の都合により、
ここに挿入されていたCDジャケットの画像を削除しました。

最後にもうひとつ、難題を・・・。

- グレン・グールドのバッハ《ゴールドベルク変奏曲》 (1955)

バッハ「ゴールドベルク変奏曲」、グレン・グールド（ピアノ）、米Columbia、ML5060, 1955年
→歴史的な名盤だが、モノラルで音質が悪い

- ゼンフ・スタジオ (Zenph Studio) による“Re-Performance” (2007)

「グレン・グールド／バッハ：ゴールドベルク変奏曲（1955年）の再創造」、ソニー・ミュージックエンタテインメント、SICC10043, 2007年

著作権等の都合により、ここに挿入されていたLP、CDジャケットの画像を削除しました。

ゼンフ・スタジオ (Zenph Studio) による “Re-Performance” (2007)

- 1955年に録音された演奏を、コンピュータ・ソフトによって解析し、打鍵や離鍵のタイミングや速度、ペダルの動きなどをデータ化
- そのデータをMIDIファイルに変換し、ヤマハの自動演奏ピアノ “Disklavier Pro” で演奏、録音
- 20世紀初頭に用いられていたリプロデュースング・タイプの自動演奏ピアノのハイテク・ヴァージョン

しかしここで問題が…

ゼンフ・スタジオ (Zenph Studio) による “Re-Performance” (2007)

● 演奏中のグールドの「歌」

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

DVD映像

『ゴールドベルク変奏曲』（『グレン・グールド・プレイズ・バッハ』より、「ゴールドベルク変奏曲」第9、10変奏の演奏部分）、ソニー・ミュージック・エンターテインメント、
SICC20147-8、2012年

ゼンフ・スタジオ (Zenph Studio) による “Re-Performance” (2007)

● 演奏中のグループの「歌」

この「歌」はグループの「演奏」の一部と
言えるのか？

この「歌」はこの「曲」の一部と
言えるのか？

Zenph Studio の制作したものはグループの
「演奏」と言えるのか？